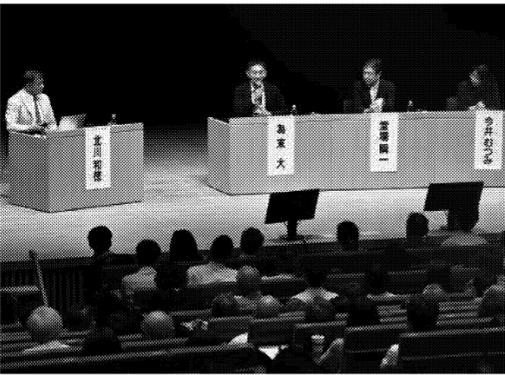


本が伸ばす競技力

パネル討論



討論するパネリストの各氏
(10月3日、東京・大手町)

司会(日本経済新聞編集委員の北川和徳) 今回のテーマは「スポーツが開くことばの世界」です。まずスポーツと言葉のかかりについての考えをお聞きしたいと思います。
為末氏 スポーツ選手は読書をする人が多い。ボクシ

堂場瞬一氏 スポーツを書くのって実は面倒くさい。競技者やその競技のファンだと、説明しなくてもわかること、知らないこともわかること、打球が左中間に飛んだ。

想像力や行間読む力育む

堂場氏 仮に室伏さんがコートだどうなんだろう。為末氏 選手は相当迷いますよ。仙一人みたいな言葉の使い方をする人だという感じがしました。

今井氏 仙一人みたいな言葉に触発されて、さらに深く考えるような選手が相手だったらすごくいいですね。相手を選ぶと思います。よいコーチは誰にでも仙一人のような言葉を使っているわけではないですね。為末氏 相手を選べない小説を書くというのは難しいですね。仙一人のような言葉は使えない。

堂場氏 読書、特に小説を読むというのは他人の人生を生きていることじゃないでしょうか。小野田元少尉の話がありました。あんな経験ができる人はまずいないわけですね。それを読んで経験できる。経験や想像できるのが読書だと思います。

スポーツと読書の関係

為末氏 選手には読書家が多い

司会(日本経済新聞編集委員の北川和徳) 今回のテーマは「スポーツが開くことばの世界」です。まずスポーツと言葉のかかりについての考えをお聞きしたいと思います。
為末氏 スポーツ選手は読書をする人が多い。ボクシ

堂場瞬一氏 スポーツを書くのって実は面倒くさい。競技者やその競技のファンだと、説明しなくてもわかること、知らないこともわかること、打球が左中間に飛んだ。

平和に関する本を読みます。例えばアウシュビッツで生き残ったフランクルが書いた『夜と霧』には、生き残った人間の条件として、愛し愛された経験が過去にあるかという描写があります。私が持っていた本だと、小野田寛郎元少尉が書いた『たった一人の30年戦争』の冒頭に「人は一人では生きられない」という文章が出てくるんです。(競技人生で)自分がすごくつらかったときに、孤独が一番つらい、その孤独を耐え切った人には何が見えるのかと思うと読んだ本です。が、むしろ人生の中で他者との感触を持った場合はどうなるかが書かれていました。

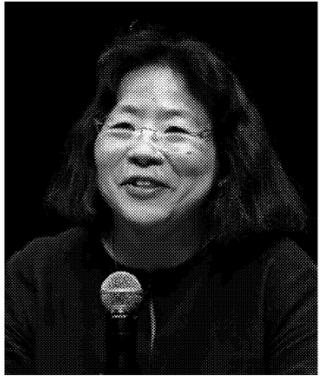
教育的な価値

司会 コミュニケーションに関しておつかがいしたいと思いますが、ライナーですか」

今井氏 私も保護者や幼児教育にかかわる方に読書がどれだけ大事かということをお話するとき、読書で得られるものは想像力と言います。想像力や行間を読む力は、小さいときから読書の習慣があるかどうかによって左右される。見えないものをイメージして考えることが人の認知にとって大事で、人と人以外の動物で一番違うところなんです。

相手の心わかってこそ

慶応義塾大学教授
今井 むつみ氏



いまい・むつみ 慶応大環境情報学部教授。専門は認知心理学など。言語や教育に与える影響を研究している。著書に「ことばと思考」「ことばの発達と謎を解く」「ことばの学習のバッドックス」、共著に「レキシコンの構築」など。

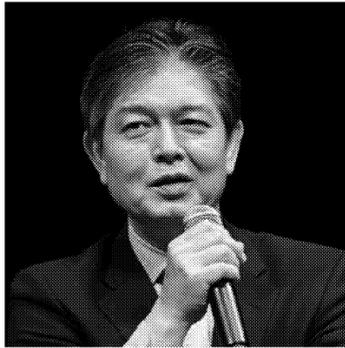
意思疎通

司会 選手村ではアスリートの皆さんはどんな話をされますか。
為末氏 北京オリンピックの選手村で(男子400リレー銀メダリストの)朝原宣治さんが「覚えてるよな」と言ったんです。文脈でたどると「いろいろ練習してきたのに失敗した、以前のことをみんな覚えてるよな」だと思ってるんですが、長い間に一緒にいた人たちにしかわからないような言葉が出てくるときがあります。

今井氏 「ピアノニア」という映画があります。ピアノリストと調律師、それぞれの道で超一流のふたりが、今までにならぬをつくり出すときに何が起るかというところを、非常に端的に示してくれているドキュメンタリー映画です。私の専門の観点からしても感動しました。ピアノリストがバッハの曲を弾くのに、こういう音をつ

りたと言つ。ピアノの音は目に見えないので、ボキヤブラリーとしては限界があるわけですね。「もうちょっと使い」「もうちょっと膨らみがある」とか。
コーチと選手の関係も同じだと思います。コーチの役割は一人では見られないイメージをつかむ助けをすることです。
コーチが正確に非常に詳細に言葉を使っても、それが相手に伝わらなければ意味がないので、人の心がわかる点まで含めて一流のコーチなんだと思います。
為末氏 マラソン指導者の小出義雄さんは、(シドニー五輪女子マラソン金メダリストの)高橋尚子さんや(バルセロナ五輪女子マラソン銀メダリストの)有森裕子さんなど、選手によって性格が変わると言われていました。良いコーチにはスタイルが決まっている以外に、選手を見ながら自分を変えるパターンもあるのではないかと思います。

作家 堂場 瞬一氏



どうば・しゅんいち 1963年茨城県生まれ。新聞記者を経て作家に。2000年「8年」で小説する新人賞を受賞してデビュー。「刑事・鳴沢」シリーズ、「チーム」など警察・スポーツ小説を中心に執筆。高校時代はラグビー部の主将。

自分と違う人間知るきっかけに

文字・活字文化推進機構 活字離れに歯止めをかけるため、文化人や経済界が中心となって2007年に設立した。「子どもの読書活動推進法」「文字・活字文化振興法」の趣旨を実現する組織として、日本語を深く理解し、表現力や思考力、情報分析力を持った人材の育成を目指している。小学校での朝の読書や読み聞かせ、調べ学習といった学校の教育活動を支援するほか、地域の公共図書館に専門司書を配置するなど幅広く活動。成人向けにも、言葉の力を養うセミナーや研修に講師を派遣するなどの取り組みを続けている。

が、国語はすごく好きでした。結局、考えることは全部読書でやったような気がするんです。
選手にはどうしても偏りが出るので、客観的にみることであれば、客観的にみるんです。もっともそれは主観をなくすということではなく、大量の主観を持つことが疑似の客観を生み出すように思います。大量の考えが書かれた本を読むことで多面的な主観を持つことができ、それが疑似的な客観になっていくのではないのでしょうか。
今井氏 人が客観的に世界を見るのは、ほぼ不可能だと思います。完全な客観はあり得ないが、自分の見ている世界が人と違っているかもしれない、ずれているかもしれないという感覚を自分で持ち、俯瞰的に見ることはとても大事です。